

[長崎県病院企業団通信]

ふくよか



2021春号

■長崎県病院企業団本部
■令和3年4月発行

目次 CONTENTS

P2...企業長より

リカレント教育のすすめ

P4...退職者ごあいさつ

6名の方からお言葉をいただきました

P6...病院TOPIX~五島中央病院~

正面玄関が新しく便利に!

P7...きりり☆発見

~上五島病院診療技術部リハビリテーション科
理学療法士 富山 慎士 さん~

P8...Break Time

きりり☆発見 誕生物語

vol.
27

リカレント教育のすすめ

企業長 米倉正大

今はコロナ禍で、多くの航空機の運行が止まり、キャンビアンテナダントの方の仕事がなく大変だと言っていました。以前のテレビで、キャンビアンテナダントの方が、「最近ほほかの職種の方が、再チャレンジして、キャンビアンテナダントになれることが多くなってきました、会社側もそのような人たちが再教育して、採用している」と言っていました。最近、日本でも

このような人を応援するシステム、即ちリカレント教育を行うところを見かけられるようになりました。以前から諸外国、特に欧米では、いったん社会人になった人が、より高みを目指し、あるいは今までとは全く異なった分野を目指し、再チャレンジをする人が多くいます。

リカレント教育とは、生涯にわたって教育と就労を交互に行うことを進める教育システムです。個人が成長し、社会に適応するためには生涯学び続けること

が必要な社会となりつつあります。近年、働き方が多様化する日本でも注目されつつあります。職種を大きく変えるために、リカレント教育を受けるといふ選択肢もあるのでありますが、今やつていう職種をさらに伸ばすために、さらなる高度な教育を受けるといふ選択もあると思います。

実際、私の知っている方々もすでにこのようなリカレント教育でより高みを目指し、仕事の生きがいを追求している人がいます。長崎県の養成医の数名は、病院で医師として働きながら長崎大学の社会人大学院に進み、研究論文を書いて博士号の資格を取りました。また最近、企業団に来ている診療看護師の方も、看護師の仕事を中断し、奨学金をもらいながら2年間、東京の看護大学院を卒業して、診療看護師の資格を取られました。あるいは、助産師や認定看護

師の方々もその資格を得るために、リカレント教育を受けたといえると思います。私たち医療の職種では、国家試験というのがあるので、全く職種を変えるという人は、あまり見かけませんが、追加の資格を取り、より高みを目指すという人を見かけます。日常の仕事を行いつつながら、資格を取るための勉強は大変だろうと思いますが、いま日本で起こっているリカレント教育が、ようやく定着する状況になっています。

新人研修でも思うことですが、各離島の病院の新人の方たちが、大病院のような仕事を覚えていく屋根瓦式の教育システムを、整えることはむづかしいと思います。ここは病院企業団の中で数病院を渡り歩いて成長するシステムも必要ではないかと思えます。

欧米ではこのリカレント教育システムは50年以上前から、当然のように行われ

ており、今になってようやく日本でもリカレント教育が定着しつつあるということなのでしょう。終身雇用の制度が一般的だった日本では、仕事場を渡り歩くという人は、あまり評価されていかなかったのが、最近、若い人が会社を変えるのを見かけるようになりました。自分を磨き上げるために、職場を変えて高みを目指すという生き方は、これからも多くなっていくように思います。

長崎県も健康寿命日本一を目指し、いろいろな施策を行っています。近年働き方が多様化する日本では、益々このリカレント教育が注目を集めていくことと思います。これまで寿命を80年と考えてきた人生設計を考え直し、今後平均寿命は延びていくと予測し、人生100年時代の到来に向けて、人生設計を行うような報道が目立っています。ある海外の研究では、2007年に日本で生まれた子供の半数が107歳より長く生きると推計されており、日本は世界一の健康長寿社会となる可能性が出てきました。老いても健やかに生活し続けるためには、職種を変えることはさておき、生涯学び続けることが必要であると考えます。最近の新聞で、アフター5

こそ腕磨きの時だと書いてありました。我々の世代に見られたアフター5の飲酒習慣は、若い層を中心に大きく減少しているといえます。ニッセイ基礎研究所によると、飲酒を「やめた」や「ほとんど飲まない」を合わせると20代男性で51%、女性は62%もいるといえます。このうち飲めるけど飲まない男性が29%もいたということです。職場の人間関係を円滑にする「飲みニケーション」よりも社会に通用する得意技を磨く若者が増えているといえます。若者は人生100年時代を見据えているのでしょうか。

病院企業団でも、昨年度から人材育成に力を入れています。これまで個人の負担が大きすぎて、リカレント教育に積極的に挑戦できなかった人も多かったのではないかと思ひ、早速そのシステムの改善を図ったところです。ぜひ挑戦してください。



WEB会議の機会が増えました！

★コロナ禍の影響で、WEB会議を行う機会が増えてきています。

他にも遠隔操作によるテレワークなども導入が進められており、今後はより円滑な『デジタル化』環境の整備が期待されています。

『デジタル化』推進のアイデア等あれば、是非本部までお寄せ下さい！

▼本部WEB会議の様子



退職者のご挨拶

令和2年度末に退職された6名の方からのご挨拶です。

壱岐病院 特命副院長 米城 和美

「戸惑い・驚き（と覚悟）・喜び・発見・希望」

＜第1章 戸惑い＞それは平成25年1月4日、向原先生からの電話で始まりました。

「壱岐に来てくれんね!?!」「きっと面白いよ」

＜第2章 驚き（と覚悟）＞翌2月、一般人として壱岐市民病院を訪れてみました。すると20年前の国立病院時代にタイムスリップした思いになりました。そこで一気にやる気スイッチが入りました。私でも何かできるかもしれないと。

＜第3章 喜び＞看護職員は、素直で優しい方ばかりでした。徐々に師長はじめ看護職員が、患者さんの事で悩んだり、喜んでくれるようになりました。また、平成27年4月には企業団に加入出来ました。

＜第4章 発見＞看護職員たちの成長が見え始めましたし、託せる職員が増えました。更に力強い協力者に会える事もできました。それで徐々に私のすることは無くなりつつあるかなと感じ始めました。

＜第5章 希望＞看護師人生の最後が、皆さまのお陰でとても充実したものになりました。一つ願いは、今後全職員が協力して「病院機能評価」を受審し、常に向上する病院であり続けて欲しいことです。本当に、本当にありがとうございました。



五島中央病院 看護部長 赤窄 かずみ



私は昭和56年4月に長崎県離島医療圏組合五島中央病院に入職し、本年3月定年退職を迎えることとなりました。平成26年に看護部長となるまで、平成14年に新病院へ新築移転、平成21年には長崎県病院企業団設立により長崎県五島中央病院と改称されるなど五島中央病院の変遷を見てきました。また、病院機能評価の受審や電子カルテの導入なども経験しました。特に印象に残っているのは、看護部長会議を各病院持ち回りで開催したことです。訪問させていただいた各病院職員皆様の「お・も・て・な・し」に感謝いたします。これにより、更に企業団病院の看護部長さん方と連携、交流が深まったように思います。また、看護部の人材育成や人材確保等を含めご指導くださった高口看護指導監の存在は心強かったです。

40年間にわたり勤務することができたのは、多くの方々に支えられたおかげだと心より感謝申し上げます。

壱岐病院 看護部長 松本 直子

本年無事に退職を迎えることが出来ました。

思い起こせば、昭和58年に助産師として当時の壱岐公立病院に採用されました。

当時は新人教育もなく、見て、聞いて、覚えて経験してみる時代でした。今では想像もできない時代です。妊産婦さんが、いかに安全に、安楽に、安心してお産が終わり退院できるかを考えていたことを記憶しています。

ここ10年は看護管理に携わってまいりました。この10年間は今までの助産の現場と違い、新しいことを学び、新しい方々との出会いもありました。中でも看護管理について多方面でご教示いただいた前任の米城看護部長との出会いは、人生の転機の1つだったと思います。ありがとうございました。

また、壱岐病院の成長にも携わることができたことは、嬉しく誇らしく思います。本当に充実した38年間でした、大変お世話になりました、心より感謝申し上げます。



上五島病院 事務部長 田本 浩嗣

昭和60年の入職時、市町立でも県立でもない組織を設立した先人の知恵と努力を思いました。

おもしろき こともなき世を おもしろく

上五島病院長、離島医療圏組合副会長、企業団企業長のご指導で、その時々で少し背伸びをすれば届く目標～情報化整備、施設整備、市町合併、企業団発足、医療従事者確保、病院再編～に向け、おもしろく勤務することができました。

『この組合は、医療施設に恵まれない離島地域に医療施設を整備するとともに、医療従事者の充実を図り、離島地域住民の健康な生活を確保することを目的とする』

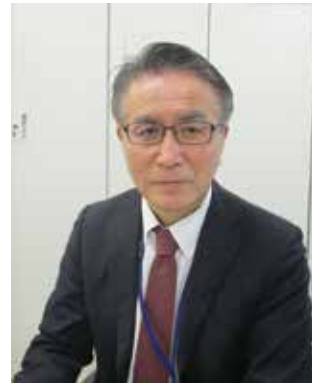
『この企業団は、県民の健康な生活を確保することを目的とする』

これは、一部事務組合設立の根幹をなす規約の第一条の一部です。

後者（企業団）には、「医療施設に恵まれない」「医療施設を整備」「医療従事者の充実」がありません。離島医療圏組合（前者）が一定の目的は達成したという評価だと思います。「医療従事者の充実」は、これからも課題です。

市町合併や公立病院のあり方検討等の時代の要請を受け、運営形態が変わりました。今後も変わることがあるでしょう。

この運営形態が後世に評価され、その特徴を活かし、時代に合わせて発展し続けることを願います。



対馬病院 事務部長 宇山 忠史



私が初めに採用されたのは、昭和62年4月「長崎県離島医療圏組合厳原病院」でした。しかし、1年後の昭和63年3月に建物の老朽化及び病床数の不足等により、「長崎県離島医療圏組合対馬いづはら病院」と名称変更し新築移転。採用後1年で新築移転という貴重な経験をさせていただきました。

その後、「国立対馬病院」が「長崎県離島医療圏組合」に経営移譲され、平成12年2月の「長崎県中対馬病院」開院に伴い、中対馬病院に異動となり医事係長を務めました。移譲当時は旧国立対馬病院職員と対馬いづはら病院職員との混合チームで運営、特に医事係においては委託会社の変更により医事会計業務等未経験者が多い中での開院となり、新病院の立ち上げに奮闘したことが昨日のこのように思い浮かびます。

その後、「中対馬病院」の老朽化等により「対馬いづはら病院」との再編統合計画が進むなか、平成26年4月に対馬いづはら病院の事務部長に就任し、平成27年5月に「長崎県対馬病院」が開院され、現在に至ります。

34年間にわたり対馬の地域医療に携わり、多くの経験をさせて頂きました。そして、多くの方々のご支援で今日まで勤務することができ、無事定年退職を迎えることができました。お世話になった皆様方には心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

富江病院 看護総師長 山田 昭美

富江病院に23歳から勤務を始めて、37年が過ぎようとしています。いろいろなことがありましたが、定年間近の年に、新型コロナウイルスがこの富江地区にも脅威を振るいました。院長をはじめ病院のスタッフ全員でこの難局に対峙し、感染拡大防止に全力を尽くし、収束をできたことを大変嬉しく思います。

本年、退職を迎え病院を離れることとなります。長い間、ご支援、ご指導いただいた職員の皆様、地域の皆様 心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

これからも、富江病院の発展と地域住民の健康生活を願い、一住民として協力して行きたいと思っております。



～五島中央病院の正面玄関が新しくなりました～



正面玄関の「回転ドア」を「引き戸タイプ」の自動ドアに改修する工事を実施し、令和2年9月に完成しました。

回転ドアは外気が直接院内に流入しないため、風や天候の影響をあまり受けないというメリットがありました。しかし、ドアの動きに合わせて人が歩く必要がありタイミングが合わず回転ドアに接触し停止することが頻繁に発生していました。また、外国製のため故障すると修理に時間がかかるというデメリットもありました。

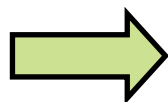
今回は、利用される方の利便性を第一に考え、回転ドアを風除室のある引き戸タイプの自動ドアに改修しました。今後は故障しても迅速に復旧できると考えております。また、なるべく安価に工事を行うため回転ドアの一部を残しましたが、正面玄関の外観を損なわず改修できたのではないかと考えております。

工事期間中、皆様には大変ご迷惑をおかけしましたがご協力をいただきありがとうございました。

これからも五島中央病院は五島の地域医療に貢献し患者様に信頼される病院をめざしてまいりますので、よろしくお願いいたします。



【改修前】



【改修後】

本部職員をつぶやき⑨

～仕事の取り組み方～

経営管理班 瀬川 大貴

この1年は、新型コロナウイルス感染症等暗いニュースが多かったですが、私個人としては、新しい職場ということで気持ちを新たに、病院業務とはまた違った本部での専門的な業務に従事するなかで多くのことを学ぶことができ、様々なスキルを磨きながら見聞を深めることができた充実した年になったと感じています。

また、私は本部では決算業務を担当していました。業務内容としては、決算書や財務諸表の作成、国・県等からの企業団の決算に関する資料作成依頼への対応等を主に行っていました。初めてのことばかりで作成に時間が掛かるものが多く、提出期限等の予定が重なることも多々ありましたので仕事の締切から逆算して、作業が溜まっているところを分散させるためにスケジュール管理の徹底を心掛けました。業務の優先順位を決めることによって、1日に取り組む目標を決めることができ、モチベーションの維持や危機感を持って日々の業務に取り組めましたし、仕事の漏れなく取り組んでこれたのではないかと感じています。

4月からは、働き方を考えながら新しいことに挑戦し、自分自身のスキルアップやプライベートを充実させていければと思います。

きらり★発見

Vol.2



上五島病院診療技術部
リハビリテーション科

とみやま しんじ

理学療法士 富山 慎士 さん

(企業団採用:平成29年9月)

企業団病院・診療所で働く「きらり」と光る職員を
発見し、インタビューしました。

聞き手:上田副企業長

- ◆趣味など、自己PRをお願いします。
◇趣味は将棋で3段です。長崎市にいる時は、湊公園で地域の方々と将棋を指していましたが、上五島へ来てからは指していないので、腕が落ちています。
- ◆上五島出身ではないとお聞きしましたが、どうして上五島へ来たのですか。
◇専門学校時代に上五島病院で実習を受けた友人がいて「上五島病院はいいところ、絶対に行きたい」という感想を聞き応募しました。現在、その友人を含めて同期3名が上五島病院で働いています。
- ◆上五島病院の雰囲気はどうですか。
◇長崎市の稲佐出身なので、海があって山もあるという風景が落ち着きます。結婚して奈良尾に住んでいますが、斜面にが並んでいる光景を見ると長崎市を離れて離島に住んでいるとあまり感じません。
- ◆どうして理学療法士になったのですか。
◇元々、ホテルで調理補助の仕事をしていましたが、幼馴染が理学療法士の専門学校へ通うということを知り、自分も資格を取って安定した仕事に就きたいと思いました。専門学校へ通い実習を重ねてやりがいを感じました。
- ◆リハビリテーション科の雰囲気はどうですか。
◇若手が多く、明るい雰囲気のなかで仕事ができます。誰に聞いても丁寧に教えてもらえます。ちなみに、職場では「トミー」と呼ばれています。
- ◆勤務のなかで一番嬉しかったことは。
◇最初に担当した脳梗塞を患った重度の患者さんが、一生懸命リハビリを続けたことで寝たきりの状態から車いすへの移動、歩行と回復し、表情も豊かになったことを今も印象深く覚えています。その患者さんのお孫さんのおじいちゃんのリハビリを頑張る様子を作文に書いたんですが、それが町広報の中で受賞し紹介され、本当に嬉しく、頑張った良かったと感じました。

- ◆自己研鑽として取り組んでいることは。
◇理学療法の分野のなかでも、脳梗塞リハや脳出血リハなど「脳」の分野に興味があり、深めていきたいです。
- ◆これから中堅職員となりますが。
◇これまで先輩から困った時に助けてもらったり、気がけていただいたことを、今度は後輩に実践していきたいです。また、電子機器等を活用し、より良いリハビリを提供していきたいです。
- ◆上五島での地域おこしへの取り組みは。
◇リハ科の先輩が中心に盛り上げていて、現在はコロナ禍で取り組めていませんが、以前は夏祭りに参加し、出店などの手伝いをしました。また、地域の介護施設を訪問して生活介助のアドバイスも行っていきたいです。新上五島町に永住するつもりです。

～副企業長より～

優しさ溢れるイメージの富山さんでした。
仕事と家庭と、地域おこしに頑張ってください！



←リハ訓練中の
富山さん



Break Time : きらり☆発見 誕生物語

今回は、ふくよか第26号からの新企画「きらり☆発見」の誕生にまつわるお話をしたいと思います。

この企画をした発端は、新型コロナウイルス感染症が拡大するなか、地域医療研究会や中堅職員研修会などの行事が中止となり、ふくよかの紙面を埋める題材が無くなったことです。企業団本部の若手職員で構成する「ふくよか編集委員会」でも何か良いアイデアはないかと検討しましたが、思うような案は出ませんでした。しびれを切らせて私が提案したのが、「10年後、20年後の病院企業団を支える事務職員にお話を聞きました!!」と題して、企業団本部で採用されたプロパー事務職員に、自分のPRや将来の抱負をインタビュー形式でお聞きお知らせするものでした。編集委員のほとんどがプロパー職員なので、総論には賛成するが、自分がインタビューを受けるのはイヤだという雰囲気でしたが、なかば強引に進めることにしました。

そこで、第1号の候補者の選定をしなければなりません。年齢順、所属ローテ、採用順、クジなど考えましたが、本部のプロパー事務職員のみなさんは、自分が最初に選ばれたくないオーラを私に頻繁に出していました。私は悩みましたが、ふくよかは企業団病院の通信誌だから、本部や事務職員に限定せず、全ての企業団病院の職員を対象にしたら良いのではと見つきました。題名も「将来の病院企業団を支える人材」へのインタビューと変更しました。

やはり、第1号の候補者を選定する必要がありました。私が直接インタビューをするので、最初は、近場である島原病院に決め、人選は島原病院の山崎事務部長にお願いしました。その人選の際に、①年齢は20歳代後半から30歳代の職員、②医師、看護師、事務職員よりコメディカル部門の職員、③島原病院を猛烈にアピールできる職員、④個性的な職員であることを参考にして欲しいとお願いし、島原病院の管理会議に諮り、検査科の北川泉さんに決定しました。

でも、問題がひとつありました、それは、題名が「将来の病院企業団を支える人材」ということで、いかにも公務員が考えた固いものであることです。また、考えました、何か良い題名は……、なかなか出ませんでした。数日経過し、朝の通勤電車に乗っている時に、ふと思いついたのが、若手職員は宝石の原石のようなもの、これから磨けば光沢を出す、キラリと光るのではないか、そういう職員を発見しようということで「きらり☆発見」という題名が生まれました。

「きらり☆発見」は、島原病院、上五島病院と続きました。次は、あなたの病院にお伺いするかもしれません。

(文：副企業長 上田 彰二)



島原病院でのインタビューの状況

編集後記

この度、人事異動で3名の方が本部を去ることとなりました。お世話になった方々とのお別れは寂しいことではありますが、皆さまの新天地でのさらなるご活躍をお祈りしております！

また4月は出会いの季節でもあります。新たに本部や企業団病院へ採用となられた皆さま、初めまして！この『ふくよか』は、本部や病院に関する情報を年に4回発信している機関誌です。新年度はなにかとお忙しいかと思いますが、休憩時間などに一息つきながら読んでいただければ幸いです。よろしくお願い致します！



ふくよか

「ふくよか」の由来

医療人として患者さんに寄り添った会話が自然と出てくるような能力を付けて欲しいとの企業長からの願いが込められています

令和3年4月発行

編集・発行/長崎県病院企業団本部
〒850-0035 長崎市元船町17-1 長崎県大波止ビル7階
TEL.095-825-2255 FAX.095-828-4759
E-mail : honbu@nagasaki-hosp-agency.or.jp
URL : http://www.nagasaki-hosp-agency.or.jp/
上記メールアドレスに記事についてのご意見・ご感想を
どんどんお寄せください！



長崎県病院企業団

検索